慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トゥキュディデスのホッブズ訳に関する一試論 : Prudence とWisdomをめぐって
Sub Title	An essay on Hobbes's translation of Thucydides : the meaning of prudence and wisdom
Author	川添, 美央子(Kawazoe, Mioko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学 (The Hiyoshi review of the social sciences). No.30 (2019.) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10425830-20200331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トゥキュディデスのホッブズ訳に関する一試論

――PrudenceとWisdomをめぐって――

川　添　美央子

序

1．トゥキュディデス『歴史』とホッブズ『ビヒモス』

トゥキュディデスの『歴史』とホッブズの『ビヒモス』を読み比べてみた者は，そのあまりの叙述態度の違いに驚かざるをえない。トゥキュディデス『歴史』の翻訳はホッブズのデビュー作である。それは確かにホッブズ自身の作品ではないとはいえ，若かりし日のホッブズはこの大部の作品を，ギリシャ語から直接翻訳するという労を取ったのであり[1]，分量も『ビヒモス』の倍はある。同じ人物がその都度大変な労力を払って送り出した歴史作品にしては，この２つの作品の叙述の内容とトーンの違いは目を覆うばかりである。

具体的にみてゆこう。トゥキュディデスは20年間アテナイから追放されたことが幸いして，敵側からも情報を集めることができたというが[2]，それにしてもその情報収集力と事実を記録することへの執念は圧倒的である。紀元前５世紀の作品にもかかわらず，20世紀の研究書においても「誰ひとりペロポネソス戦争の実態が彼の言葉と違うものだったと言いえていない[3]」と言われるのは，驚異的でもある。対する『ビヒモス』は17世紀の作品であるが，翻訳者の山田園子によっても「史実の記載に誤りが目立つ」と述べられており[4]，事柄の正確な記録への執念はなかったようである。

それ以上にトゥキュディデスを読みながら感銘を受けるのは，極力公平であろうとする叙述態度である。その結果，事実がひたすら淡々と書かれている部分が若干退屈なのは否めないものの，ことスピーチが紹介される箇所になると，アテネの使節の発言もラケダイモン側の発言も，同等に生き生きと描かれるため，読み手はどの立場にも感情移入することができ，結果としてホッブズのいう「どちらの側もひいきせず，

祖国を愛する者でなく真実を愛する者」（EW8:xxv/ 下42）による作品であることが伝わってくる[5]。対照的に『ビヒモス』は，いみじくも訳者の山田園子が「ホッブズの叙述は決して公平なものではなく[6]」と述べているように，どこの頁を見ても国王に肩入れし，議会を敵視しているのは明らかである。たとえば看過しえないのは「悪意があった（B254/185）」という『ビヒモス』の記述である。トゥキュディデス翻訳の「読者への序文」においてホッブズは，歴史叙述において「ひそかな狙いを持った巧妙な推測」を綴るような書き方を批判しつつ，トゥキュディデスは決して「行為自身が明白に導く以上に，人々の心へ入り込んでいくこともありません（EW8:viii/ 上219）」と，その禁欲的態度を賛美している。その約40年後の作品において，「議会が兵士として送り出す人は王に悪意を抱き[7]」「戦闘時には勝利への誘因となるもの，すなわち悪意があった[8]」と，議会側の心に入り込むのは，トゥキュディデスの方針に忠実な書き方とはいえない。

また評価をあらわす言葉の量の違いも気になる。といっても，あくまで翻訳を通読した上での印象なので限界はあるが，特にネガティヴな評価を表す言葉の量や頻度には顕著な差が見られる。トゥキュディデスはごくたまにテミストクレスやペリクレス，アンティポンなどを賛美する。アンティポンの演説については「私の時代に至るまで他に例をみないほどの素晴らしい出来映え」（8:68.2）と絶賛するものの，ポジティブな評価についてすら総じて抑制的な調子が多く，分量も少ない。ましてネガティブな評価，つまり登場する国や人物をなじるような表現はそれ以上に少ない。目にとまったものとして，アルキビアデスについての文章で「個人的な場面で彼が見せる異常なほどに自堕落な生活態度」（6:15.3-4）という文章があった。この部分のホッブズ訳は「彼の人柄や生活のあり方において過剰なところがあった」というくらいの意味である[9]。つまり目につく人格批判の表現はこの程度であるから，やはりトゥキュディデスの作品はその抑制された筆致が一つの魅力だといって間違いはない。

それにひきかえ『ビヒモス』では「重大な過失（a very great fault）」（B215/244）「議会の不正，無礼，偽善（their iniustice, impudence, and hypocrisy）」（B267/199）「つまらない連中（petty men）」（B343/281）など，登場する人物や団体をおとしめるような表現は，これでもかと言わんばかりに登場する。「歴史の本性は叙述的（narrative）であること」（EW8:viii/ 上219）とし，真実を愛するトゥキュディデスこそ歴史家の鑑とあがめていた初期の志は，内戦を経てすっかり失われてしまったのだ

ろうか。

この落差の理由としてさしあたり考えられるのは，山田も解説で述べているように，「『リヴァイアサン』執筆の時点で，科学や理性の持つ説得力の限界を認識するに至り，人文主義的な方法でそれを補強」すべきだという認識があったゆえに，「内戦の記憶と恐怖が人々の心に再現・視覚化される」効果を狙って，感情を刺激するような書き方をした，という解釈であろう[10]。しかしそれ以外でも，この二つの歴史書の性格の違いは，ホッブズの思想的遍歴を様々な仕方で物語っているように思えてならない。

「政治的判断のために有益な知識を提供する書」を「政治教育の書」とするならば，1629年にトゥキュディデスの翻訳を公刊したとき，ホッブズはたしかに歴史書はまた政治教育の書でもあるべきだと考えていただろう。冒頭の献辞において，この作品を献呈する理由として，「その著作は高貴な方々にとって役に立つ指針となることを含み，かつ重大な行動において采配を振ることを可能にする」（EW8:v/ 上217）と書いている。そもそもトゥキュディデスの時代において，『歴史』を彩るクレオンとディオドトス，ニキアスとアルキビアデスのものをはじめとする様々な討論が，当時の教育内容を構成するものだったと指摘されている[11]。それ以外でも『歴史』の内容は軍事，外交から裁判，政体の変遷に至るまで幅広く，ホッブズがこれを翻訳したのはこれらの全てが政治についての有益な知識となる書と見たからだと考えられる。では『ビヒモス』はどうか。山田は『ビヒモス』のねらいが「主権者への服従という政治的義務を（話者）B に納得させてゆく」と述べている[12]。つまるところ，政治的判断のために有益な知識の内容は，どこから出発してどのように変わったのだろうか。

我々は歴史書を読むとき，政治的判断力をつける糧として何を吸収しなければならないのか。そしてこの問題についてのホッブズの認識は，トゥキュディデス翻訳時と『ビヒモス』執筆時とではどのように変化したのか。本稿ではこの問題を考えるために，Prudence と Wisdom[13]という概念に焦点をあて，これら二つの歴史作品ばかりでなく『リヴァイアサン』にも目を配りつつ，この二つの概念の意味内容の変遷を考えてみる。

ところで，なぜ Prudenec と Wisdom なのか。まず，前者が『リヴァイアサン』の鍵概念の一つであることはよく知られている。しかし『リヴァイアサン』ばかりでなく，トゥキュディデス翻訳の序文においても歴史の主要な任務は「過去の行為を知ることを通じて，現代においては慎慮を以て（prudently），未来にむかっては先見の明を持って振る舞うように人々を導く」（EW8:vii/ 上220）ことというふうに，この言葉

は副詞で登場しつつ，歴史を読む目的の一つとされる概念である。他方 Wisdom は『リヴァイアサン』において Prudence と同義のものとして言い換えのような形で登場するのみならず[14]，トゥキュディデスを翻訳するにあたり，同じギリシャ語の ξύνεσις を prudent と訳したり wisdom と訳したりしている[15]。つまりこの二つの概念は半ば重なり合いながらまとまった形で，思慮・慎慮・賢明さ・知恵・英知などと呼ばれる人間の何らかの資質を示しているのである。これらの概念の変化をたどることで，「歴史書を通じた政治教育」についてのホッブズの態度変化について，多少の理解を得ることができよう。

2．研究史

さて，本論に入る前に，トゥキュディデスとホッブズの関係に関する研究史に，わずかだが触れておく。この 2 人の関係の一つの典型的な取り上げ方は，国際法や国際政治という観点からのもので，リアリズムを手がかりに分析しようという類のものである[16]。ただし本稿は政治に必要な資質や政治教育に関心があるため，国際政治関連の研究史には踏み込まない。その他昨今よく見られる解釈は，ホッブズはトゥキュディデスから，何よりもレトリックを吸収した，とするものである。代表的なのはやはりスキナーの研究だろう。レトリックに対する同時代人の全般的な関心を念頭に置きつつ，スキナーは翻訳の序に付された『トゥキュディデスの生涯と歴史』が，いかに ars rhetorica の基準にのっとりながら練られたものか，丁寧に示している[17]。その方向を受け継ぐものに，バトラーの論文があるだろう。トゥキュディデスの翻訳と並んで，同時期のその他のエッセーなども分析しつつ，生き生きした描写がイマジネーションをかき立て，行為へと向かわせることに，ホッブズが変わらず関心を持ち続けたことを示す[18]。先程紹介した山田の解説や，梅田百合香の小論[19]も，この読み方の延長上に位置づけてよいだろう。

これらの読み方が間違っているとは全く思わない。ホッブズはトゥキュディデスから確かにレトリックの技法を吸収し，イマジネーションの力を学習したといえるだろう。しかしあれ程大部の，事柄の進行を微に入り細に入り記録した書物を，当時の地図を復元してみるという労力まで払って翻訳し，吸収したかったのはレトリックだけなのかという疑問も残る。この疑問は，そもそもスキナーが分析しているのがホッブズの付した序文や扉絵であって，翻訳そのものではないこと，すなわち「ホッブズは

どう訳したか」という問題にさほど踏み込んでいないことにも起因する。

このような疑問を抱く者にとって興味深いのが，30年前の業績ではあるのだが，ブラウンの論文である。「人文主義者ホッブズと科学者ホッブズの区別は誇張されてきた[20]」と考えるブラウンの解釈の特徴は，トゥキュディデスのホッブズへの影響を，科学的思考の培養という点にも見いだそうとすることである。研究手法もスキナーと異なり，ホッブズが選択した訳語に注意を払う。たとえばロエブ版英訳者のスミスと比較しながら，合計69ある aitia，aition，aitioi に対し，スミスは cause を 6 回使っているがホッブズは13回だといった具合に，cause，necessity などの訳語の選択をホッブズに特徴的なものとしてあぶり出す[21]。そして，ホッブズはトゥキュディデスから因果概念をも学習したのであり，それはやがてガリレオ運動理論の理解にも役立ったことを示すのである[22]。

ブラウンほど徹底した，網羅的なやり方ではなく，また完全に同じ手法とはいえないかもしれないが，本稿も，ホッブズの付した訳語からその思考に接近するという手法をとりたい。その際，ブラウンのように科学的思考と人文主義の分け難さを前提とし，その境界にある概念に着目するならば，なぜ理性ではないのか，という疑問がありうるだろう。勿論「理性」もトゥキュディデスにおいてしばしば登場する言葉である[23]。しかしホッブズの献辞や序文をみるならば，やはりそこで前面に出ているのは慎慮と英知である。歴史は推論の手続きを学ぶためではなく，賢明になるためにこそ手に取られるべきものなのである。フランスの代表的なトゥキュディデス研究者のロミーは，当時のギリシャ人には実践的賢明さの規則を導くことへの執念があったことを指摘し，賢明さをその頃採用されていた普遍的行動準則として挙げてもいる[24]。従って，まずは歴史を読む目的とされ，トゥキュディデスの時代のギリシャ人達にとっても重要な関心事だった思慮と英知について，探求してみることにしよう。

一節　トゥキュディデス『歴史』における慎慮と英知

さて，慎慮と英知に焦点を当てると述べたが，まず当然のことながら，ホッブズはトゥキュディデスその人も英知の持ち主と考えていた。「そうした仕事の完遂は，自身の財産，意向や英知が可能にした面もあるが，彼の気質からして機敏，勤勉，誠実だったから」（EW8:xvii/ 上212-211）と，譲歩を示す従属節の中ではあるが，wisdom の

語を用いつつホッブズはトゥキュディデスを描写する。特に「トゥーキューディデースの生涯と歴史」後半部は，ヘロドトスを称揚するディオニシウスの論点を一つ一つ取り上げては論駁するという仕方で，トゥキュディデスの肩を持つことにかなりの紙幅を割いている。この入れ込みようを見るならば，トゥキュディデス自身による人物や物事の評価と，ホッブズ自身のそれとは，大きく隔たっていなかったという前提で議論しても許されると考える。すなわち，トゥキュディデスが「思慮」「英知」「賢明」として表現する人物や事柄については，当時のホッブズも同じようにそれを「思慮」「英知」「賢明」としておおむね評価したと考えてよいのではないか。

以上の前提に立った上で，ではホッブズはどういった人物や状況にこれらの訳語をあてているのか，見てゆくことにしよう。ホッブズの訳書において，prudence は副詞や形容詞の形を合わせても 3 回（序文を入れて 4 回）しか登場しないが――そのこと自体，その後 prudence が鍵概念となっていたことを考えると考察に値する問題かもしれない――，wise，wisdom の語は合計すると夥しい回数で登場する。そこでまずトゥキュディデスの地の文で用いられ，トゥキュディデス本人の評価と見なしてよい場合，あるいはトゥキュディデスが評価していると思われる話者の，演説の中に登場する事例をとりあげながら，「知恵」「英知」「賢明さ」「慎慮」などの言葉が，具体的にどのような事柄や人物を指して使われていたのか，追跡してみたい。

1．テミストクレス

まず注目すべき人物はアテナイの将軍テミストクレスである。テミストクレスはトゥキュディデス自身によっても「洞察力を実証してみせた」「生来の賢明さ」（共に 1:183.3）と高く評価されているだけでなく，アテナイ使節の演説の中でも「最も思慮ある指揮者（στρατηγὸν ξυνετώτατον，the prudent commander）」（1:74.1, EW8:89）として礼賛されている将軍であり，実際ペルシア戦争においてギリシャを勝利に導いた人物といっても過言ではない。『歴史』の記述を手がかりに，テミストクレスの働きと人物像を簡単に要約しておく。

アテナイ使節によれば，ペルシア戦争が示してみせたのは「ギリシアの国運が艦船に依存していた」（1:74.1）ことであったが，そもそもアテナイ人を説得してその船を建造させたのがテミストクレスであった（1:14.3）。その結果，400隻の軍船の 3 分の 2 をアテナイが提供し，さらにテミストクレスは海峡の海戦の功労者となり，その海戦

が国運を救ったとも言われる（1:74）。先述の「賢明さ」などの賛嘆の表現が頻出するのは，テミストクレスが陶片追放にあった後，ペルシアに亡命したあとの場面においてであり，ペルシア語およびペルシアの慣習を素早く学習し，「事前にも事後にも補充の学習を全く加えなくても緊急の問題に最短の考慮によって最上の判断を下した」（1:138.3）といった具合にその「即座に必要なことを考えつく点において，他の何人よりも優れていた」（1:138.3–4）行動が描かれる。しかし実際にテミストクレスの思慮と判断力の非凡さが伝わってくるのは，ペルシア亡命後の場面以上に，アテネの城壁建造を完遂させる場面である（1:90–93）。のらりくらりと口実を並べ，時間稼ぎの策を適宜弄しながら，城壁が建つことを嫌がるラケダイモン側の抗議をつっぱねて結果的に城壁を完成させる道筋の，その抜け目のなさと判断の素早さは，「誰よりも驚嘆に値する」「天賦の能力」（いずれも1:138.3）という形容を裏打ちするものであろう。

逆にいえば，テミストクレスを見る限り，誠実さや正直さは，慎慮は勿論のこと知恵（wisdom）の不可欠な要素とも，必ずしも見なされていないということでもある。むしろ事柄の展開を「見透す」能力，かつ自国の振る舞いが同盟諸市全体のためでもあると説得的に提示する能力などが混淆して，テミストクレスを「最も思慮ある指揮者」たらしめているといえるだろう[25]。

2．ペリクレス

続いて取り上げるべき政治家は，言うまでもなくクサンティッポスの子ペリクレスである。アテナイ人をラケダイモン人との戦争に駆り立てた本人だが，ペリクレスが卓越した指導者であったことは，同時代の人々の認識を表す記述としても，トゥキュディデス本人の評価を示す文章としても残っている。何よりも，ペリクレスが葬送における演説者に指名されたことが，同時代の人々がペリクレスを抜きん出た指導者と見ていたことを物語る。なぜなら葬儀では「識見において最も賢明であり，名声においても傑出している人物が市民の中から選出されて，戦死者に相応しい賞賛の辞を述べる」（2:34.6）[26]ことになっていたからである。確かに，トゥキュディデスが本当にペリクレスを思慮深いとみていたかどうかについては議論がある[27]。とはいえ淡々と事実の叙述に徹し，自身の評価を文に散りばめることには禁欲的なトゥキュディデスが，「（ペリクレスが）死亡すると，彼の先見の明が認識されるに至った」（2:65.7）と述べ，あるいは「その原因は，彼は名声および識見（dignity and wisdom, τε ἀξιώματι καὶ τῇ

γνωμη）によって有能であり，金銭による買収とは明らかに無縁だったので，自由に大衆を制御したからであり，また彼自身が民衆を導いたのであって，むしろ自分が導かれることは決してなかったから」（2:65.8）と書くのは，この著者としては相当に好意的な記述である。

そこで，『歴史』に描かれたペリクレスの言動や行動をたどることで，思慮や英知の持つ豊かさを掘り起こしてゆこう。最初に確認しておきたいが，ペリクレスの基本的な方向性は「自国の権益保持」（1:141.1）ではあるものの，はじめから自国第一で暴走しているのではなく，「吾々が裁判に委ねると申し出た場合にも（ラケダイモン側が）これを受け付けようとしない」（1:140.2）ゆえに，人々を開戦に向けて鼓舞している。つまり，ポリス間の紛争を解決する裁判の慣習へも目を配りつつ[28]，アテネの支配権の維持を最優先の目的として据えている。

指導者としてのペリクレスの優れた資質は，海やポリスを守り抜くためにも「農地や家屋は放棄すべき」（1:143.5）ことを指示し，現実に田畑を捨て市内への移住を実現させてしまう（2:16-17）大胆な決断力や指導力に見てとれる。しかしここでは特に，やがてホッブズの人間論や認識論にも受け継がれることを予感させる能力として，二つのものに着目しておこう。

一つはごく単純なものであり，いわば量的なものに関する計算能力である。すなわち，同盟諸市からの貢税，備蓄の金銀などの戦争遂行資金，また重装歩兵や騎馬弓兵，三段櫓船，城壁の長さなど，軍事力の構成要素を具体的な数値にして提示しているさまは（2:13），素朴な形ながら理性の本質を計算と捉えたホッブズの原形を見る思いがする。完全に量的とはいえないかもしれないが，一方で自由を，他方で隷属，支配権の喪失，自分たちの支配がもたらした憎悪に伴う危険を天秤にかけさせるような発言も，ホッブズの思考＝計算テーゼを彷彿とさせるものである。

第二により重要なのは，ここでもまた見透し（foresight）である。テミストクレスにおいても際立っていた見透しの能力だったが，ペリクレスはより広く深く，様々な次元においてものを見透す能力があった。たとえば，主に物理的諸条件を考慮に入れた，事柄の展開の見透しについては，ペロポネソス側の事情を推測しつつ説明する箇所に詳しい（1:141-143）。いわく，ペロポネソス側は統一的な協議機関が欠けているので決定が遅いこと，資金の欠乏によって支障をきたすはずのこと，海戦の経験と練習不足等の条件のために，アテナイ側の勝利を十分に期待できるとする主張である。

しかし，ペリクレスの「見透し」の力にさらなる深みを与えているのは，物理的諸条件から結果をはじきだす人間心理や民衆の感情の動きを察知，理解し，それらを考慮に入れながら，たえず先手を打って対処しようとする姿勢であろう。ラケダイモン人の王アルキダモスと自分の客友関係に基づく好意の帰結[29]と，それが招く民衆の反感を予測し，先手を打って自分の農地・家屋を国有財産として手放すという宣言（2:12）は，個人や民衆の感情がもたらす可能的な展開をいくつも思いうかべつつ，その都度しかるべき手を打つ判断力を示す。また，農地の掠奪を眼前にしてペリクレスに対し激怒し，出撃を要求する市民達を見ても判断がゆらぐことがない様子（2:22）は，「自分が（民衆に）導かれる事は決してなかった」（2:65.8）というトゥキュディデスの記述の正しさを証明している。ペリクレス自身の演説の中にも「他人についての賞賛は，自分でも実行できると思える範囲内までは我慢できるものであるが，その程度を越えれば嫉妬して信じようとはしないもの」（2:35）など，人間心理を見抜いた言葉もある。そのため「吾々が享受している政体は隣国の法律の模倣ではなく，吾々自身が他の人々の模範になっている」（2:37.1），「吾々のポリス全体がギリシアの教育機関」（2:41）などとアテナイ賛美を繰り返すこの有名な追悼演説自体が，聞き手の感情に訴えかけ，感情を梃子に民衆を統御する重要な作戦にも見えてくる。そして疫病発生後になされた，ペリクレス最後の演説でもある激励演説は，このような人間心理の洞察の集大成ともいえる。ここでも「私に対し諸君の激怒が起こったのは私の予想どおりであり」（2:60.1）という言葉で始まり，疫病という突発的な不合理な事態に気概が弱まることに理解を示しつつも（2:61.3），アテナイの栄光を思い起こさせることで人々の誇りを刺激している（2:63.1）。ペリクレス自身がこの演説の中で予見や予知の重要性に複数回言及していることにも，注目すべきだろう（2:62.5，64.6[30]）。卓越した予測能力を自ら備えていただけでなく，人々に対してもそれを持つよう促すさまは，予知こそは思慮の本質をなしていたことをうかがわせる。

これまでペリクレスの予知の能力への高い評価を取り上げてきたが，彼が開戦を促したペロポネソス戦争は結果的に敗北した。スキナーは，右側にペリクレスの文字と先導されているような民衆の絵，左側にアルキダモスの文字と少数の貴族を配したホッブズ訳書の扉絵を取り上げつつ，スパルタの勝利を描いた本書によって左側の価値の高さを印象づけようとするホッブズの戦略を指摘する[31]。しかし少なくともトゥキュディデス自身は，致命的なものとなったシケリア遠征の失敗を「判断の誤謬というよ

りも，派遣した人々が適切な追加決議を行わなかった」(2:65.12) ことなどに帰し，「当時のペリクレスは十二分の根拠に基づいて，ペロポンネソス軍だけが相手ならば，アテナイは容易に勝てるはずだと予見していた」(2:65.13) と述べる。すなわち，『歴史』におけるペリクレスについてのまとまった記述は，ペリクレスを弁護するような言葉で締めくくられている。よって，スキナーがほのめかすように，この頃のホッブズが本当にペリクレスをデマゴーグと考えていたのか，卓越したリーダーだというトゥキュディデスの評価を共有していた可能性が皆無だったのか，簡単に結論を出すことはできないと思われる。

3．ディオドトス

続いてディオドトスを取り上げる。といっても，将軍だったテミストクレスやペリクレスと異なり，ディオドトスはそのような目立つ地位にいたわけではなく[32]，本稿で取り上げる他の登場人物とは違ってトゥキュディデスの地の文においてディオドトスを直接評価する言葉があるわけでもない。しかしミュティレネ人の処刑に関するディオドトスの演説のホッブズ訳には，wise の語が頻繁に登場しており，思慮や賢明さについてのまとまった議論となっている。翻訳者の藤縄も訳注において「ディオドトスについては何も知られていない」ものの，その演説内容を「注目すべき政治理論」と述べている[33]。さらに我々にとって興味深いのは，オーウィンが「ディオドトスにかかると人間の非合理性の一般理論ができあがるのであり，トゥキュディデスの偉大な読者ホッブズを予告している[34]」と述べていることである。筆者もまた，ディオドトスとホッブズの人間理解の類似性を感じるため，印象論に基づく選択にはなってしまうが，しばしディオドトスの発言も分析しておきたい。

ディオドトスもまたこれまで扱った登場人物達と同じように，「予見」の重要性は口にする。「最も重大な問題に関連して演説する吾々は，遙かに遠くまで予見して (περαιτέρω προνοοῦντας) 語るのだと自負すべきである」(3:43.4) というように。しかしディオドトスの演説でより一層注目したいのは次の二点である。

第一は，オーウィンが「人間の非合理性についての一般理論」と名付けたように，感情や激情に流されやすい弱い者としての人間理解が徹底していることである。「人間はすべて私的にも公的にも過誤を犯すのが自然[35]」(3:45.3) であるゆえに，刑罰の抑止力への懐疑を示してみせたり，「〈権勢〉は傲慢や驕慢によって貪欲を生み出す」うえ

に，その他の情況が加わると「人間の激情によって危険に導く」（3:43.4-5）という文章など，『リヴァイアサン』に書かれていても違和感のない文章である。「希望と欲望は至るところに存在し，欲望は導く」（3:45）という言葉も，引力のごとく描かれるホッブズの欲求概念を連想させる。演説の中で繰り返されるこのような人間描写は，思慮とはまず，弱い者としての人間本性の把握が前提となっていることを示しているようである。

第二の特徴は，国家や社会を主体として思慮というものが考えられていること，そして有益さの考慮が思慮と結びつけられており，正・不正という基準よりも優先さるべきもののように説かれていることである[36]。

発言の冒頭は，熟慮や分別などの意味を持つ εὐβουλία について，性急や激怒と敵対するもので，性急は無分別と，激怒は無教養，短見と共存する（3:42.1-2）といった，人間の性質についての心理的かつ一般的な説明で始めている。しかしながらディオドトスの演説の一つの重要なテーマは，賢く思慮ある国家の何たるかについてである。そのテーマについての語りは以下のように始められる。「健全なポリス（wise state, σωφρονα πολιν）は，最も多くの善い提案を為す者に対して，重ねて名誉を与える必要はないが，しかし既存の名誉を剝奪すべきでもない。そして提案が通過しなかった者に対しても，これを罰するどころか，名誉を傷つけることも許されない」（3:42.5）。ここから43章までの内容は，善い提案が無闇に否定されず，またその提案者が民衆の怒りから守られ，かつ名誉心のために無益な意見が登場しないための知恵，という風に要約できる。

そして，演説全体の基調をなすのは，正・不正ではなく国家にとっての有益性からものを考えるべきだという主張であり，ディオドトスの言葉では「もし吾々に思慮があれば，吾々にとって論争すべき問題は，彼らの不正をめぐるものではなく，吾々自身の政策上の分別の問題である」（3:44.1）となる。ディオドトスは正義や人道の見地からミュティレネ人の死刑に反対しているのではなく，「死刑が得策でない」（3:44.2）がゆえであって，「吾々にとって彼らが有益であるための方策を審議[37]」しようとする。そして，アテナイの力は他のポリスからの貢税納入にあるとして，「吾々は，犯罪者に対して厳しい裁判官となって自身に損害を与えるよりは，むしろ刑罰は適度にして，財力の点で有力なポリスを今後とも吾々が利用できるように見守り，そして警戒は苛酷な法律ではなく実際の配慮によって実行すべきである」（3:46.4-5）と主張する。「私

の考えでは，吾々が正義を盾にして滅すべきでない者を滅すよりは，吾々自身が不正を甘受するほうが，帝国を維持するためには遙かに有益である」（3:47.5）という言葉にも，正・不正より有益性が勝ることが端的に表現されている。そしてディオドトスの演説は「武力によって無分別に突進する者よりは，良く思慮する者こそが敵に対して遙かに強力だからである」（3:48.2）というふうに締めくくられる。いわばディオドトスにとって思慮とは，弱き人間本性の深い理解に基づきつつ，その都度国家にとって有益な方向に事態を持ってゆくことと要約できる。ロミーは，トゥキュディデスにとって見透しこそ指導者の資質の最重要要素だったと述べ，テミストクレス，ペリクレスやその他様々な演説家にも見られると主張する。その際興味深いのはロミーが「見透しは人々の怒りを誘うものについての一般的考察に依拠する」と述べていることである[38]。感情や欲望を統御できない人間本性の弱さをよく把握していたペリクレス，ディオドトスは特に，ロミーが述べるような「見透し」を備えていたと言えるだろう。

4．ブラシダス

最後にスパルタの将軍ブラシダスを取り上げる。トゥキュディデスにとっては敵将にあたるが，作品全体の中で，ペリクレスに割かれている以上の紙幅がブラシダスにあてられており，ブラシダスの各戦での活躍とともに，トゥキュディデスがこの敵将に抱いた敬意の念を示している。実際のトゥキュディデスによる評価の言葉としては，「全軍の中で最も傑出していたのは，ブラシダスであった（4:11.3）」「この時のブラシダスの美徳や賢明さ（ἀρετὴ και ξύνεσις，virtue and wisdom）こそが，……アテナイの同盟諸市民にとって，ラケダイモン人に対する熱い期待を生み出す原因となった（4:81.2）」などの文章を見ることができる。

ただし，ここで取り上げるブラシダスの優れた二つの特徴のうちの一つはやはり「軍事的見透しの鋭さ」となるため，既視感があるだろう。ただ，本稿は「賢明さ」をその具体的姿において描くことも一つの目的としているため，見透しの鋭さを表すブラシダスの判断や行動を，手短かにまとめておこう。

まず，的確な軍事的判断力をはじめとした，武将としての優れた側面だが，そもそも『歴史』においてブラシダスが最初に登場する場面が，たまたま通りかかったラコニアのメトネで，アテナイ軍の城壁攻撃を察知して内部の人々を救い，その勇敢さがスパルタで表彰されるというエピソードである。その後も，コリントス海戦後のサラ

ミス島といい（2:93），トロネからのアテナイ軍撤退の際といい（5:8），機会到来とみるや急襲して陣地をおさえる機敏さと判断力はひときわ目をひく。勿論，静観するほうが有利と判断したら静観し，戦わずして目的を達成したエピソードもある（4:73）。様々な条件を考慮に入れつつ確かな戦略的見透しを持つ力は，テミストクレスやペリクレスにも共通するところである。

ブラシダスの優れた点の二つ目は，公正さや全体への配慮があるところである。「公平な立場から対応すべきと考えるようになった（for the public good of their own state）」（4:83.4, EW8:467）や，「彼らは（ブラシダスの出した布告を――川添補足）公正なもの（δίκαιον）と受け取った（they all thought the proclamation reasonable）」（4:106.1, EW8:488-489）のように記されている。その公平性や公共の善への配慮が弁舌，行動の両面において表れるのは，進軍した先の同盟諸市の扱いであり，いわば相手の権利や主体性を尊重するような態度である。

アンドロス人の植民市アカントスにおけるブラシダスの語りかけは，自分たちは「ギリシアを解放するためにアテナイ人と戦う」という大義で始まるが，その地の父祖の制度を無視するつもりはないこと（4:86.4），覇権を求めるのではなく独立自治を提供するつもりであること（4:87.5-6）を主張しており，じっさいにその直後アカントス人はアテナイからの離反を決議している。またアンピリポス攻略においても，平等かつ同様の権利を享有しつつ留まることを認めるという「穏やかな協定を提案」（4:105.2）したことによって，人々はブラシダスが布告した条件に基づいて彼を迎え入れることを決める（4:106）など，アカントスにおけるのと同様，相手の権利を尊重するような配慮を見せる。そしてこれら一連のふるまいによって，「アテナイ人に隷属していた諸都市も，アンピリポスの攻略や提示された降伏の条件，更には彼の温厚な人柄について聞くにつれ，これまで以上に熱心に離反へと駆り立てられる」（4:108.3）ようになる。ブラシダスは5巻10章で戦死するのだが，死後になっても名前が登場する回数もペリクレス以上であり，トゥキュディデスがこの敵将に強い印象を抱いていたことを物語っているだろう。

さて，この節をしめくくるにあたり，もう一度ホッブズの書いた献辞に戻ってみよう。献辞において彼は故・第二代キャヴェンディシュ卿の人徳を称える中で，「（父君はその学問を――川添補足）この国を益するための英知（wisdom）と能力に転じられた」と述べている。献辞における故キャヴェンディシュ卿の描写が，これまで取り上

げてきた4人の登場人物の特質とある程度共通するなら，それらはやはりホッブズがwisdomとして思い描いたものだと同定してよいだろう。

故キャヴェンディシュ卿についてホッブズの述べるところは，「自由人の学芸を自由に研究した人」であり，学問はひけらかすためではなく「生活の統禦と公共善（the public good）のために」習得し，「派閥や野心に血道を上げず」「公私にわたる難事や重大事における堅実な助言と明晰な自己主張ゆえに有能」で，「人間をよく見抜き」，「名誉と正直は同一物であることが，その人物に明白に見てとれる，そういうお方が父君」（以上すべてEW8:iv-v/ 上223）であった。すなわち，これらのことをなさしめる力としてwisdomが概念されていた。

これらの描写をみると，the public goodはブラシダスの説明でホッブズも使った訳語であるし，人間をよく見抜いていたことはペリクレス，ディオドトスの特徴として挙げたものであった。明晰な自己主張すなわち説得力ある弁論は，本稿で取り上げた人々のみならず，『歴史』の多くの登場人物がなしえているところである。あえていえば「正直さ（honesty）」だけがトゥキュディデスの英雄達には目だたない美徳だが，それを除けば，トゥキュディデスが描いた英知とホッブズの考えていたそれは，少なくともトゥキュディデスを翻訳していた1620年代においては，やはり大部分重なっていたと見てよいのではないか。

二節　ホッブズの慎慮と英知

さて，本稿で立てた問いは，政治教育の手段としての歴史という点に関する，ホッブズの考えの変遷をたどることであった。ここではまず，ホッブズ自身の歴史書『ビヒモス』を扱う前に，彼の政治思想の作品である『リヴァイアサン』を瞥見する。『ビヒモス』は『リヴァイアサン』という理論的土台の上に立てられた作品という面があり，文の端々に表現された政治観や政治教育観に気付くためには，『リヴァイアサン』の理解が欠かせない。しかも，本稿が参照した，トゥキュディデスとホッブズの関係を論ずる研究者はほとんど皆，『リヴァイアサン』を題材としているのであって『ビヒモス』への言及は滅多に見られない。従って両者の関係を考えたいなら，まず『リヴァイアサン』の要点を理解し，その上でその変奏として『ビヒモス』を検討する方がよい。

1．『リヴァイアサン』

そこで本節では，ホッブズ自身が「慎慮」「英知」という二つの概念をどのように描いているか，確認する。トゥキュディデスにおいては豊かで多様な広がりを持っていた慎慮と英知だが，これらはホッブズの政治理論ではどのような姿になったのだろうか。トゥキュディデスが描いた4人の人物の賢明さや慎慮の中で，いかなる要素はホッブズの理論においても生き残り，何は捨て去られていったのか，『リヴァイアサン』を取り上げて検討してみよう。

まずこの二つの概念に共通して言えることだが，双方ともその豊穣さを失い，ひどく痩せて貧弱な内容になってしまった。それでもまだ「慎慮」はホッブズなりの定義づけを与えられ，重要な概念として扱われているふしはある。しかしwisdomはprudenceよりも登場回数こそ多いものの，これといった定義や説明が与えられているわけでもなく，さしたる含蓄のないただの普通名詞になり果てている。「成功は力である，なぜならそれは賢明で運がよいという評判を作り出すからである」（Lev10:41），「彼の好意の並々ならぬ賢明さをみることから（啓示を信じるよう導かれる）」（Lev26:148）といった具合である。さらに言えば，「賢明さ」「知恵」は実体を失い，ネガティヴな意味における記号として使われるケースも目につく。「（安楽な人々が）好むのは，自分の知恵を示すことであり，（中略）コモンウェルス統治者を制御しようとする」（Lev17:87）などのように，火種となる記号のごとき扱いを受けている。

このように捉えどころのなくなった「賢明さ」に比べると，「慎慮」は明確な定義づけを与えられているぶん，トゥキュディデス翻訳時代との連続と断絶をはっきり示す，メルクマールの役割を果たしてくれている。断絶面を一言で述べるならば，『リヴァイアサン』では，「慎慮」はすっかり光彩を失い，平板かつ意味の狭められた内容となって登場しているということだろう。逆に連続面，すなわちホッブズの「慎慮」がトゥキュディデスから受け継いでいる要素は「見透し」だろう。「慎慮」は以下のように定義されるからである。

> ときに人はある行為の結果を知りたいと望み，そして過去の類似の行為とその行為の結果を次から次へと考える。同じような行為からは同じような結果が続くものと想定しているのである。ある犯罪者がどうなるのか見透す人（he that foresees）は，以前似たような犯罪に何が続くのを見たか再検討する。（中略）こ

の種の思考が見透し，慎慮，先見（Providence）または賢さ（Wisdom）と呼ばれる。（Lev3:10）

慎慮が見透し（foresight）の言葉に言い換えられつつ説明されるのは，既にトゥキュディデスの翻訳において見られたものであった。別言すれば，トゥキュディデスの「慎慮」のうち，ホッブズのそれに残存している要素は，もっぱら foresee，foresight などの，訳語の中での言葉のみだともいえる。トゥキュディデスの登場人物たちの見透しの力強さ，卓抜さに比べると，その中味は見る影もなく痩せて枯れた感があるからである。ホッブズの「慎慮」の特徴を二つ指摘しながら，そのことを明らかにしてゆこう。

第一に，トゥキュディデスと比較してみた時に際立つ特徴の一つは，慎慮は人によってあまり差が見られないとする点である。同じような年齢なら同じような量の経験を持っているから，農夫だろうが枢密顧問官だろうが慎慮の程度も同じという考え方（Lev8:34）や，男女に慎慮の違いはない（Lev20:102）などの記述は，ひときわ優れた慎慮の持ち主もいれば凡庸な者もいるという可能性を，封じ込めるかのようである。先程引用した慎慮の定義の中には，同義の語として「賢明さ」も挙げられていたが，このような平等性の徹底は，賢明さについてもいえる。

私は強さについてのそれ以上に，人間の間におけるより一層の平等性があるのを見る。というのも慎慮は単に経験であるから，同様の時間が，人々が同様に専念する物事について，同じように人々に授けるものなのである。そのような平等性を信じがたくしているのは，人が自身の賢明さについて持つうぬぼれた考えによるもので，殆ど全ての人々は，自分は民衆よりもはるかに賢明だと考えているのである。（中略）たとえ他人の多くがより機知があり雄弁で学識があることを認めたとしても，自分と同程度に賢明な者がたくさんいることをめったに信じようとしないのが人間の本性なのだ。（Lev13:60-61）

抑制的な筆致のトゥキュディデスがそれでも「最も思慮ある指導者」「識見において最も賢明」といった賛辞の文を時折しのばせていたこと，当時のギリシャ人もペリクレスやブラシダスの傑出ぶりを認めていたこと，そしてホッブズ本人も献辞において，

故キャヴェンディッシュ卿の英知を誉め称えていたことを想起すると，20年後のこの作品において，慎慮と賢明さを平準化せんとするホッブズの変節ぶりは際立っている。確かに，先程引用した『リヴァイアサン』３章の慎慮の定義は，トゥキュディデスに登場する慎慮や見透しの定義としてもあてはまらなくはない。しかし第一節で描いた思慮とホッブズの説明を見比べると，筋骨隆々とした力強い美を感じさせる生きた肉体と，実験室の骸骨を見比べた時ほどの印象の差がある。それはペリクレスやブラシダスなどが持っていた，経験の広がりがもたらす知恵の深さという要素を全て捨象しているからである。なぜ慎慮をかくも平坦にしなければならないのか。それは第二の論点である，理性・科学と慎慮の関係に目を向けると明らかになる。

そこで第二の特徴に移ろう。ホッブズの慎慮は理性や科学とは明確に区別され，いわばそれらに道を譲るものである。しかし同時に筆者の解釈によれば，雑多でまとまりのない我々の思考が理性と科学を身に付けてゆくための橋渡し，連結環のようなものでもある。

まず，「われわれは通常，双方（慎慮と学識――川添補足）に対し知恵（Wisdom）という一語しか持たないが，ラテン人は常に慎慮 Prudentia と学識 Sapientia を区別して，前者は経験に，後者は科学によるものとした」（Lev5:22）[39]などの記述に明らかなように，慎慮と理性・科学ははっきりと線引きがなされなくてはならない。慎慮は経験によってのみ得られるが，理性は名辞の適切な付与に基礎づけられているからである（Lev5:21）。「法の慎慮でも，従属的裁判官達の賢明さでもなく，コモンウェルスという，この我々の人工的人間の理性と彼の命令こそが法をつくる」（Lev26:140）という宣言は，人工的人間の理性が統治する空間にあって，古典的思慮が参与する余地はもはやなくなったことを物語る。だからこそ，「政治的慎慮あると称する人々」（Lev19:174）はコモンウェルスにとって有害であるかのように扱われているのである。

ところで，理性とはきっぱり区別されるはずの慎慮が，なお我々の散漫な思考と理性の連結項だと言いうるのはなぜか。たしかにホッブズが直接，理性と慎慮を接続させる表現をしているわけではなく，「理性は……慎慮のように経験によってのみ得られるものではなく，勤勉によって習得されるもの」（Lev5:21）のように，区別し並存させていることのほうが多い。この両者を媒介するのは「しるし」である。「しるしとは帰結の前提事象であり，反対に，似たような帰結が以前に観察されていた場合には，前提の帰結である」（Lev3:10）ことから，多くの経験を持つ者は多くのしるしを持ち，

その結果多くの慎慮を持つといわれる（Lev3:10）。この問題については別の機会に詳論したためここでは深く立ち入らないが，手短にいえば，理性や学問を構成する「ことば」の通用力は，ある程度「しるし」の普遍性に依拠するのであり，その「しるし」の普遍性は，慎慮の培養土でもある「経験」が共有されているという事態が担保しているのであった[40]。回り道ではあるがこのように考えると，理性的推論や学問が植え付けられるための素地という役割が，慎慮には与えられていると言いうるだろう。

すると，「慎慮」「賢明さ」が輝きを失い，平板化された理由も明らかだろう。テミストクレスやペリクレスのような突出した思慮の存在を認めてしまったら，人工的理性は君臨できなくなる。と同時に，誰でも一定程度の慎慮の持ち主でなければ，理性的推論や学問を教え込むこともできないからである。

トゥキュディデスを翻訳していた頃ホッブズの念頭にあった政治教育の目的の一つは確かに，ペリクレスやブラシダスの美徳と知恵に学んでもらうことにあっただろう。しかし『リヴァイアサン』執筆当時の政治教育の目的は，徳や思慮の陶冶ではなく人工的理性の植え付けに変わっていたということである。

2．『ビヒモス』

さて，本稿の冒頭で指摘したのは，トゥキュディデス『歴史』とホッブズ『ビヒモス』の内容および書き方の乖離であった。そして，トゥキュディデスの翻訳の献辞において重要視されていた「慎慮」「賢明さ」という概念だけとってみても，『歴史』と『リヴァイアサン』ではこれまで考察してきたような違いがあった。では，「慎慮」や「賢明さ」は『ビヒモス』ではどのように扱われているのだろうか。

『リヴァイアサン』において「賢明さ」がそうであったように，双方ともこれといった深い内容を備えることなく，ごく一般的に通用している意味合いの普通名詞として使われている割合は非常に多い。「その他の点では十分に思慮のある人々」（B129/41）がスコトゥスやスアレスを信じたという記述や，「議会はどのような知恵を絞ったのか」（B213/142）などの文章である。また『リヴァイアサン』同様，ネガティブな記号のように使われている場合もある（B269/201）。

一つ確認しておきたいのは，『リヴァイアサン』でなされていたような，慎慮と理性を明確に区別した上で後者こそ支配的知となるべきだという枠組みは，『ビヒモス』の中にもさりげなく忍び込んでいるということである。それは「無謬の準則，及び公正

と正義に関する真の学問を欠けば，たとえ才知，慎慮や勤勉さがあったとしても，コモンウェルスの統治には充分ではない」（B198/125）という文に端的に表れているし，使われている語はWisdomではないが「彼らになかったのは知恵（Wit）ではなく，一人格が統治権を持つべき原因や根拠についての知識だった」（B324/261）にも同様の図式が見てとれる。「法への服従が臣民の分別（Prudence）」（B165/83）という考え方も，慎慮の平板化と同時に，慎慮を媒介として理性により法の服従を受け入れるという『リヴァイアサン』の論理の延長上にある。

ただし，こと国王について語られるときのみは，トゥキュディデスには見られたところの「賢さ」「徳」といった語の含蓄と実質が，若干蘇っているようにも見える。特に，『ビヒモス』では「賢明とは（中略）自分の創意工夫という唯一の力で，自分の仕事をやりとおす仕方を知る者のことだ」（B157/73）という具合に，一応wisdomの定義らしきものが与えられていることが興味深い。そしてチャールズ1世について「この王は何という勇気，忍耐，英知（Wisdom），そして善をお持ちになられていたか」（B317/251）と感嘆してみせる場面もある[41]。

すなわち，いみじくも「臣民の倫理と主権者の倫理を区別する」（B165/83）と公言しているように，こと主権者や王が話題となる時のみは，徳や賢明さといった古典的価値は，一瞬だけわずかにかつての輝きを取り戻している。「王の徳の一つは力強さ（Fortitude）だ」（B165/83）をはじめとして王の徳を長々と列挙する（B165/83）のも，『リヴァイアサン』には見られない叙述態度である。また，とりたてて賢いとも思慮深いとも言われてはいないものの，「あのような将軍を，必要な度ごとに王が抱えられるとよい」（B390/330）と称えられるモンク将軍は，軍事や交渉における見透しの力と冷静さを示したように描かれており，トゥキュディデスの世界をふと思い起こさせる。

このように『ビヒモス』においては，主権者，王，王に貢献した人物などがテーマになる時にのみ，徳や賢明さが輝いていたトゥキュディデスの世界観が，ほんの少しだけ顔をのぞかせているのである。

結

さて，冒頭の問に戻ろう。慎慮や賢明さという概念に光を当ててみたとき，ホッブズの「歴史書による政治教育」観はどのような変遷をたどったと言えるだろうか。本

稿一節で描いて来た思慮と英知は，トゥキュディデスの登場人物であれ故キャヴェンディシュ卿であれ，ほとんどがリーダーに求められる資質である。ディオドトスを除いて，皆それぞれ非凡な軍事的，政治的指導者達である。だからこそ序文にも「この著作は高貴な方々にとっての指針を含み」とあるのであって，政治的に助言をする立場にあるような身分の人々に，リーダーにふさわしい知恵と慎慮を身に付けてもらうことが，この翻訳の重要な狙いであった。これを別の角度から述べれば，確かにこの頃スキナーの言うように民主政への嫌悪があったとしても，少数者の合議や，エリートが国王に助言することへの拒絶反応まではなかったということだろう。そのエリートの判断力育成に資する素材であるために，トゥキュディデス『歴史』は翻訳された。

しかしその後『リヴァイアサン』で登場する慎慮は，もはやエリートの資質ではなく，誰もが身に付けていてほしい予測能力となった。そしてその最低限の慎慮を持つ人々に読ませるべき歴史書である『ビヒモス』は，真の学問に基づいたコモンウェルス統治に従うようにという呼びかけが，随所に織り込まれている。

山田園子は『ビヒモス』の叙述が，視覚化の効果，記憶の喚起などの要素を総動員しながら，読者を「観衆」にしたことを強調した[42]。国王とその立役者のみが凡庸ならざる英知や勇気の持ち主のごとく描かれるのは，それこそがスポットライトを当て，観衆の目に焼きつけるべき要素だからである。いわばトゥキュディデスの「思慮」からホッブズの「慎慮」を差し引いた余りの部分，非凡さ・豊かさ・光彩に満ちた部分は，涵養するものではなく鑑賞するものへと変わっていったのである。

＊本稿は，2018年３月31日京都大学にて行われた「17世紀イギリス思想史研究の現在と未来：山田園子先生退職記念シンポジウム」において，「ホッブズの歴史叙述研究へ向けて」と題して行った報告原稿を大幅に展開させたものである。当日質問やコメントを下さった方々に感謝申し上げるとともに，長らく日本におけるイギリス思想史研究を牽引して下さった山田園子先生に，あらためて心より御礼申し上げたい。

※凡例

テクストへの参照方法は以下のとおりである。『トゥーキューディデースの生涯と歴史』については，大学図書館等で参照の容易なモルスワース版８巻をEW８と示し，続いて頁数をローマ数字小文字で記したあと，『広島法学』所収の山田園子訳の頁数（頁の下部に記されている数字）を上下を記したあとに示す。『リヴァイアサン』についてはLevの略号のあと，近年マルカム版をはじめ様々な版が出ているため，まず章の数字を示し，それからのいずれの版にも共通に記され

ている初版の頁数を示す。『ビヒモス』については，B の略号のあと，山田も訳者解説で推奨している P. Searward 編のもの（クラレンドン版）の頁数，続いて山田園子訳岩波文庫の頁数を示す。引用に際し，『トゥーキューディデースの生涯と歴史』『ビヒモス』の訳文は基本的に山田訳を使用したが，一部だけ変更した箇所もある。

トゥキュディデス『歴史』については慣例に従い，巻，章，節の順に示す。ホッブズによるトゥキュディデスの翻訳については，EW のあとモルスワース版の巻番号 8 または 9 を付し，続いて頁数を示す。引用の訳文は基本的に藤縄・城江訳によるが，一部だけ議論を分かりやすくするため，ホッブズの英訳に近い言葉を当てたところもある。

注

1　スキナーによれば，既に存在したトマス・ニコルによる英語版がセッセルの仏語版（それ自体は1460年のロレンツォ・ヴァラ版を底本にしたもの）に基づいていたのに対し，ホッブズはエミリオ・ポルタ版のギリシャ語テクストから直接翻訳した。Skinner（2018），p. 247.

2　久保（1992）209頁。

3　久保（1992）210頁。

4　山田園子「解説」『ビヒモス』岩波文庫，384頁。

5　マラもまたトゥキュディデスの特徴を多声性と見ると同時に，政治をカオスと見る点においてトゥキュディデスとホッブズの類似点を見いだしている。Mara（2017），pp. 534–536.

6　山田園子「解説」『ビヒモス』岩波文庫，384頁。

7　“spightfully bent against the king” (S254/185).

8　“that was Spight” (S254/185).

9　“his excess in things that concerne his person and form of life” (EW9:129). 原文は (φοβηθέντες γὰρ αὐτοῦ οἱ πολλοὶ) τὸ μέγεθος τῆς τε κατὰ τὸ ἑαντοῦ σῶμα παρανομίας ἐς τὴν δίαιταν. なおそのアルキビアデスは，人生を競争と見なすホッブズ的人物の先駆的モデルだという指摘もある。Brown（1987），p. 48.

10　山田園子「解説」『ビヒモス』岩波文庫，374–375頁。

11　Romilly (2005), pp. 180–181.

12　山田園子「解説」『ビヒモス』岩波文庫，374頁。

13　ホッブズは Wisedome と綴るが，この言葉をキーワードとして扱う本稿では検索のしやすさなどを考え，現代の標準的な綴りにならい wisdom と標記する。

14　本稿第二節 1 を参照のこと。

15　Lidell&Scot では σύνεσις の見出し語で登場する語であり，そこでの語義は faculty of quick comprehension, mother-wit, sagacity などである。主格で登場する ἀρετὴ και ξύνεσις（4:81.2）は the virtue and wisdom（EW8:466）と訳され，また与格で登場する ξυνέδει（1:138.3）は by his natural prudence（EW8:142）と訳されている。ただし本稿はトゥキュディデスの「思慮」ではなく，ホッブズがそのように訳したものに焦点をあてるため，ホッブズが wise や prudence を

当てた原語がすべて ξύνεσις であるわけではない。筆者のギリシャ語力の乏しさのため，原語については，突きとめられたものについてのみ記してある。

16　Johnson（1993），Warren（2009）．ただしジョンソンはトゥキュディデスがホッブズよりも多面的な著作家であることを強調するため，必ずしもトゥキュディデスをリアリストという側面のみで理解しているわけではない。Johnson（1993），pp. 201–213.

17　Skinner（1996），p. 244–249. また，この著書にも『人文主義からホッブズへ』にも共通するもう一つの主張は，ホッブズはトゥキュディデスから民主主義に批判的な考え方も吸収した，というものである。Skinner（2018），pp. 247–254.

18　Butler (2006), pp. 466–482.

19　梅田（2016）。

20　Brown (1989), p. 218.

21　Brown (1989), p. 238.

22　Brown (1989), p. 256.

23　「理性に最も頼らない場合には，激情に最も駆られて行動へ走ることになる」（2:11.8）など。

24　Romilly (1990), p. 80, 85.

25　トゥキュディデスによるテミストクレスの描写にヘロドトス的な要素を見て取り，参考にされた原資料について探求するブローゼルは，両者の違いを，ヘロドトスの描くテミストクレスがギリシャの救世主とすると，トゥキュディデスはよりアテネの愛国者としての側面を浮き彫りにしていると指摘している。Blösel（2012）.

26　“some one thought to exceed the rest in wisdom and dignity”（EW8.188），訳書 1 巻180頁。

27　ロミーは，ペリクレスは幻想も抱かなかったかわりに思慮も理想も持っていなかったとトゥキュディデスが示した，と解釈する。Romilly（1990），pp. 87–88.

28　1:144にも「裁判に委ねる意志がある」という言葉がある。

29　ラケダイモン人が，ペリクレスの農地だけを荒らさないでおくこと。

30　「知性は希望（エルピス）よりは判断力（グノーメー）に信を置く。希望は万事窮した場合には力となるが，それ以上に確実な予見を提供してくれるのは，現実に立脚した『判断力』である」（2:62.5）。ホッブズの訳は “and more to judgment upon certainties, wherein there is more sure foresight”（EW8:216–217）.「諸君は未来に対しては来たるべき栄光を予知し，当面のことに対しては避けるべき恥辱を弁えて，決然たる熱意により両方を獲得すべきである」（2:62.6）など。

31　Skinner (2018), pp. 247–254.

32　久保は「政治家」としている。久保（1992）507頁。

33　トゥキュディデス『歴史』 1 （藤縄謙三訳）291頁，注（ 1 ）。

34　Orwin (2017), p. 360.

35　ホッブズの訳文は “They have it by nature, both men and cities, to commit offences” となっている（EW8:311）。

36　久保は，紀元前６－５世紀の各都市において，何が人間本性で何が習俗なのかが問題になっていたという背景をふまえ，その中で法と人間の相剋を正面に打ち出した者としてディオドトスを位置づけている。久保（1992）506-507頁。本稿で指摘する二つの特徴を総合すると，確かにそのように言えるかもしれない。

37　“but we consult of them, which way we may serve ourselves of them to our most advantage hereafter” (EW8:310-311).

38　Romilly (1990), pp. 90-91.

39　慎慮などの精神の他の能力と，学問を区別する記述は（Lev13:60-61）にもあり。

40　川添（2010）５章参照。

41　ただしその箇所では踏み込んだ英知の説明があるわけではなく，チャールズ１世の英知の内実を知りたければ，ヒースの『年代記』を参照せよ，とされる。

42　山田園子「解説」『ビヒモス』岩波文庫，375頁。

参考文献

〈一次文献〉

ホッブズ

‘Of the Life and History of Thucydides’, The History of the Grecian War written by Thucydides, in W. Molesworth (ed.), The English Works of Thomas Hobbes, Vol.VIII, 1843.（山田園子訳「トマス・ホッブズ『トゥーキューディデースの生涯と歴史』（上・下）」，『広島法学』, 31（２），2007，211-228: 31（３），2008, 86-102）

Leviathan, The Clarendon Edition of the Works of Thomas Hobbes, ed. Noel Malcom, 3 vols., Clarendon Press, 2012.

Behemoth, The Clarendon Edition of the Works of Thomas Hobbes, ed. Paul Seaward, Oxford University Press, 2010.（山田園子訳『ビヒモス』岩波文庫，2014）

トゥキュディデス

Thucydidis Historiae I,II, Oxford Classical Text.

トゥキュディデス『歴史』１，２（藤縄謙三・城江良和訳，京都大学学術出版会）2000，2003。

〈二次文献〉

Balot, Forsdyke, and Foster (eds), *The Oxford Handbook of Thucydides*, Oxford University Press, 2017.

Blösel, Wolfgang, ‘Thucydides on Themistocles: A Herodetean Narrator?’ in Foster and Lateiner (2012).

Brown Jr., Cliford W. Thucydides, ‘Hobbes, and the linear causal perspective’, in *History of Political Thought*. vol. 10, issue 2, p215-256. 1989.

——, ‘Thucydides, Hobbes, and the derivation of anarcy’, in *History of Political Thought*. vol. 8, issue 1, p33-62. 1989.

Butler, Todd, 'Image, Rhetoric, and Politics in the early Thomas Hobbes', *Journal of the History of Ideas*, vol. 67, issue 3, p465–487, 2006.

Foster, and Lateiner (eds), *Thucydides and Herodotus*, Oxford University Press, 2012.

Johnson, Laurie M., *Thucydides, Hobbes, and the Interpretation of Realism*, Northern Illinois University Press, 1993.

川添美央子『ホッブズ　人為と自然――自由意志論争から政治思想へ』創文社，2010年

久保正彰『ギリシァ・ラテン文学研究――叙述技法を中心に』岩波書店，1992年

Mara, Gerald, 'Political Philosophy in an Unstable World: Comparing Thucydides and Plato on the Possibilities of Politics', in Balot, Forsdyke, and Foster (2017).

Orwin, Clifford, 'Thucydides on Nature and Human Conduct', in Balot, Forsdyke, and Foster (2017)

Romilly, Jacqueline de, *La construction de la vérité chez Thucydide*, Julliard, 1990.

――, *Histoire et raison chez Thucydide*, Les Belles Lettres, 2005 (1956).

Skinner, Quentin, *Reason and Rhetoric in the Philosophy of Hobbes*, Cambridge University Press, 1996.

――, *From Humanism to Hobbes: Studies in Rhetoric and Politics*, Cambridge University Press, 2018.

梅田百合香「ホッブズとトゥキュディデスの朗誦される歴史――ホッブズの後期著作の文体と朗読」『政治思想学会会報』42号，2016年

Warren, Christoper N, 'Hobbes's Thucydides and the Colonial Law of Nations', *Seventeenth Century*, vol. 24, issue 2, 2009.